

『紅樓夢』第二十一回『莊子』 胠篋篇続作の意味するもの

王 竹

は じ め に

『莊子』胠篋篇の冒頭に「胠篋」の一語があり、それが篇名になっている。「胠篋」とは、「篋を^{はこ}ひら^く」ことである。泥棒が箱を開いて財物を盗むのを未然に防ぐため、人は箱に鍵をかける。しかし、大盗賊は鍵をかけたままの箱を丸ごと持ち去っていくので、箱に鍵をかける意味はまったくない。それどころか、鍵をかけることは、大盗賊のために運びやすいように用意しておいたことになる¹⁾。莊子は、箱に鍵をかけようとする賢しらを儒家の知恵に喩え、小さな人知は、大盗賊の前で何の役にも立たないどころか、反って害になるという。莊子は、人知を働かせることの愚かしさを指摘し、人知を捨てて自然素朴な状態に戻れと、儒家の知恵や仁義を徹底的に否定する。これが胠篋篇全篇に一貫するテーマである。

曹雪芹は第二十一回で『莊子』胠篋篇の冒頭の一文を直接引用した上で、主人公宝玉を借りてこれを書き続けるという奇抜な設定で物語を展開させている。曹雪芹はなぜ宝玉に『莊子』胠篋篇を書き続けさせたのだろうか。そもそも、この続作の設定は曹雪芹が単なる思いつきでしたことなのだろう

キーワード：『紅樓夢』、脂評、莊子、胠篋篇、三大病

うか。

実は、宝玉に肱篋篇の続作を書かせるという設定の裏に、曹雪芹は必然的な要因を用意していた。それは主人公宝玉の「三大病」である。宝玉は伝統的な儒教の価値観に叛逆し、自由に憧れ、何よりも人から諫められることを嫌い、礼儀を軽視し人の情こそが大切であると考え、死を避けるのではなく冷静に見つめて受け入れる。これが脂評にいう宝玉の「三大病」である。すでに拙稿「宝玉の「三大病」と莊子——『紅樓夢』第二十一回の脂評を基に」²⁾で検証したように、宝玉の「三大病」はすべて莊子の価値観・世界観と重なり、宝玉の思惟方法も人間観も、その根底に莊子の思想が横たわっている。脂硯齋が宝玉の「三大病」を肱篋篇の続作の直前に指摘したのは、読者に宝玉の「大病」を理解させ、それによって肱篋篇続作の真意を正しく、かつ深く理解させようとしたからであった。

この肱篋篇続作の真意を解明するには、続作を「三大病」との関係で読み解くことによってはじめて可能となる。しかしながら、管見の限りでは、『紅樓夢』研究において、肱篋篇続作の真意、それと「三大病」の因果関係について考察した研究は皆無に等しい。

本稿では、宝玉はどのように肱篋篇に倣って書き続けているのか、宝玉の「三大病」は続作の中でどのように反映されているのか、宝玉が肱篋篇を書き続けた行為は何を意味しているのか、それらについて考察する。すなわち、第二十一回所引肱篋篇と続作の意味を正しく理解することによって主人公の価値観を解明し、『紅樓夢』全編における肱篋篇続作の意味を明らかにするのが本稿のねらいである。

一 肱篋篇続作の場面

第二十一回では、姉妹や侍女たちといさかいを起こして煩悶する宝玉が描かれている³⁾。侍女襲人は不真面目な生活を送る宝玉を戒めるために、

『紅樓夢』第二十一回『莊子』脰篋篇続作の意味するもの

あえて宝玉を無視し続けた。そんな時、宝玉は無意識のうちに『莊子』を手にして読み始める。すると、自分の苛立つ気持ちを抑えさせることができた。そして、脰篋篇を読み続けるうちに感興がわき、その後を続けて書いてみようと思い立ったのである。

いやもおうもない、思いきって「彼女たちは死んだものと思う、どのみちほくだって死ぬんだもの」そう考えると、すこしも気にかかることはなくなり、愉快的気持ちになった。そこで四児に命じて、蠟燭の芯を切らせ、茶を入れさせて、ひとり『南華經』を読んだ。その外篇の一節、

……それゆえ、聖人の知恵のようなものは捨て去ってしまえば、大盜賊は消えるだろうし、珠玉などという贅沢なものはみな碎いてしまえば、こそ泥などはなくなる。割符を焼き、印鑑を壊してしまえば、民は純朴となり、升や衡をなくしてしまえば、民は争いをしなくなる。こうして聖人の定めた法というものを全廃して、はじめに民はともに論議できるようになり、音階などはぶちこわし、楽器などもたたきこわし、瞽瞍の耳を塞げば、天下の人はみなそれぞれの耳のすばらしさを取りもどすであらうし、紋様を失くし、色彩を捨て、離朱の目を被えば、天下のひとはみな自分の眼でものが見られるようになろうし、曲尺や墨縄を絶ち、物差しやぶんまわしなどを棄て、工垂の指を折れば、天下の人はみな自分でものが創れるようになろう。

そこまで読むと感興が湧き、酒の力も手伝って、思わず筆をとってあとをつづけた。

花を焚き、麝を散じてしまえば、奥の部屋から忠告というものを解放することになろう。宝釵の気高い姿をそこない、黛玉の不思議

な肉体を灰にして、情意というものを滅してしまえば、奥の部屋の美醜の差はなくなってしまうだろう。彼女たちが忠告をしなくなれば、兄弟不仲になることもなかろう。宝釵の気高い姿をそこなえば、あこがれる心もなくなり、黛玉の不思議な肉体を灰にすれば、その才を慕う心も消えよう。かの宝釵、黛玉、襲人、麝月のやかからは、みな綱を張り、落とし穴をつくって、天下を惑わし、陥れようとする者である。

書きおわると筆を投げだして床についたが、頭を枕につけるや眠りこんでしまっ、明け方まで何も知らずに寝入ってしまった⁴⁾。

说不得横心只当他们死了，横竖自然也要过的。便权当他们死了，毫无牵挂，反能怡然自悦。因命四儿剪灯烹茶，自己看了一回《南华经》。正看至《外篇·胠篋》一则，其文曰：

故绝圣弃知，大盗乃止，擿玉毁珠，小盗不起；焚符破玺，而民朴鄙，掊斗折衡，而民不争，殫残天下之圣法，而民始可与论议。擢乱六律，铄绝竽瑟，塞瞽旷之耳，而天下始人含其聪矣；灭文章，散五采，胶离朱之目，而天下始人含其明矣，毁绝钩绳而弃规矩，攬工倕之指，而天下始人有其巧矣。

看至此，意趣洋洋，趁着酒兴，不禁提笔续曰：

焚花散麝，而闺阁始人含其劝矣，戕宝釵之仙姿，灰黛玉之灵窍，丧减情意，而闺阁之美恶始相类矣。彼含其劝，则无参商之虞矣；戕其仙姿，无恋爱之心矣；灰其灵窍，无才思之情矣。彼釵，玉，花，麝者，皆张其罗而穴其隧，所以迷眩缠陷天下者也。

续华，掷笔就寝。头刚着枕便忽睡去，一夜竟不知所之，直至天明方醒⁵⁾。

冒頭の一文「それゆえ、聖人の知恵のようなものは捨て去ってしまえば、

大盜賊は消えるだろう（故絶聖弃知，大盜乃止）」は、脰篋篇の別のところには「聖人死せざれば，大盜止まず（聖人不死，大盜不止）」⁶⁾とある。いずれも『老子』の一文「聖を絶ち智を棄つれば，民の利は百倍す（絶聖棄智，民利百倍）」（第十九章）に基づくもので，莊子は老子の意を取り，そのまま脰篋篇に用いたのである。

脰篋篇は，総じていえば，聖人の知恵や能力を棄てることこそ国家を安定させ，升や秤などを壊せば民は利益を争わず，法律を廃すれば民は自由になるという。莊子はここで「瞽瞍の耳」，「離朱の目」，「工垂の指」を例として挙げ，音楽家の耳を塞げば民は自分の本来の聴力を取り戻すことができ，千里眼の目を膠付けにすれば民は本来の視力を持っていることを知り，腕利きの名工の指を痛めつけば民はもてる能力を認めることができるといい，相対的な価値観は無意味だというのである。

さて，「花を焚き，麝を散じてしまえば」から「陥れようとする者である」までの宝玉が書き続けた文章を読むと，それは脰篋篇を模倣したものではなく，あくまで続きであることがわかる。もし宝玉が『莊子』の文章を模倣して書いたものなら，主節から書き変えたはずである。しかし，それは続きであるから主節が変わらず，莊子が挙げた譬えの後に新たな譬えを挙げていった。

莊子は「瞽瞍の耳」，「離朱の目」，「工垂の指」を挙げ，宝玉は襲人・麝月・黛玉・宝釵の四人を例として書き続け，それによって具体的な内容で脰篋篇を繋いでいる。すなわち，莊子の挙げた「優れた」耳と目と指の次に，「優れた」容姿，「優れた」気質の人を例にして脰篋篇を続け，「襲人と麝月がいなければ，彼女たちの忠告もなくなり，煩いから解放される。黛玉と宝釵の美貌や情意がなければ，美醜の区別もなくなる。宝釵の美が消えれば，恋する気も失せる。黛玉のような優れた気質がなければ，その才を慕う心もなくなる」と，宝玉は四人のことに自分の気持ちを莊子に倣っ

て書き続けたのである。

知恵を棄てて自然に帰れば、世界が平安無事となるというのが肘篋篇の主旨である。悩ましいこと、争いの元をその根源まで探求しようとするのが莊子である。問題が起きるのはその問題の本体にある。本体がなくなれば、問題は自然に消えていく。同じように、宝玉は黛玉や宝釵たちの美貌と美徳、そして才能がなければ、憧れや思慕も消えるはず。そのためには、その本体、すなわち黛玉や宝釵たちの存在そのものが問題だということになる。宝玉がこれほど悶々とするのは、悩まされる対象そのもの、彼女たちの存在そのものにほかならない、そう思い至った宝玉は、自らの思いを肘篋篇に倣ってついつい書いてしまったというのである。

この肘篋篇は曹雪芹が思いつきで引用したものではない。第二十一回のこの場面では、襲人のつれない態度に嫌な思いをしつつ、悶々とする気持ちを解消できない宝玉に、曹雪芹は肘篋篇という薬を処方したのである。莊子は、聖人の知恵や技術は却って人を不幸にするものであるから、聖を絶って知を棄て人為を去れば、人は悠然たる自然に包まれるかのように心の安定がもたらされるという。曹雪芹はこの莊子の論法を小説に取り入れ、主人公宝玉に肘篋篇を読ませて心の悩みの解消法を考えさせる場面をことさら設定し、宝玉がいかに『莊子』に共感しているかということ、『莊子』こそ彼の心の拠り所であるということを強調するためであって、曹雪芹は宝玉の考え方を莊子の「聖人死せざれば、大盜止まず」に象徴しようとしたのである。だから、「そこまで読むと感興が湧き、酒の力も手伝って、思わず筆をとってあとをつづけた」ほど、宝玉が肘篋篇を好んだという場面を設定したのである。

侍女たちに無視される寂しさや苛立ちを解消する薬肘篋篇を読み、この続きを書いた宝玉は、「書きおわると筆を投げだして床についたが、頭を枕につけるや眠りこんでしまって、明け方まで何も知らずに寝入ってしまっ

『紅樓夢』第二十一回『莊子』脰篋篇続作の意味するもの

た」ほど、気持ちがすっきりした。宝玉が脰篋篇を書き続けた効果はてきめん、ぐっすり眠ってしまった宝玉の様子は無邪気そのもの。曹雪芹は宝玉を通して人間の自然な姿を表現したのである。その自然な姿とは、まさしく脰篋篇が理想とする人間の姿——何事にも執着せず自由な境地に生きる人間にほかならない。

ところが、宝玉の書いた脰篋篇の続きは、最愛の知己黛玉に痛烈に批判されることとなる。

宝玉が正房へ出かけたあとに、ひょっこり黛玉がやってきた。宝玉が部屋にいなかったのも、机の上の書物をひっくり返していると、ちょうど昨日の『莊子』が出てきて、宝玉がつづけて書いたところを見てしまい、思わず腹も立ったがおかしくもあり、いつか筆を取って一首の詩を書きつける。

誰のすさびか わけもなく

『莊子』の文の 盗み書き

おのが無学を 悔いもせで

たわごと並べ ひと詰る

そう書きおわると正房へ行って史太君に挨拶し、それから王氏のところへやってくる⁷⁾。

宝玉往上房去后，谁知黛玉走来，见宝玉不在房中，因翻弄案上书看，可巧翻出昨儿的《庄子》来。看至所续之处，不觉又气又笑，不禁也提笔续书一绝云：

无端弄笔是何人？作践南华庄子因。

不悔自己无见识，却将丑语怪他人！

写毕，也往上房来见贾母，后往王夫人处来⁸⁾。

この場面は黛玉が宝玉の「舘簾篇」続編に対し、厳しく批判したところである。黛玉はそれを「盗み書き（无端弄笔）」、「無学（无见识）」、「たわごと（丑語）」などと、宝玉の文はまったく価値がないと諷する詩を残したのである。この黛玉の諷諭の詩には、二つの意味を読み取ることができる。

ひとつは、黛玉と宝玉との親密な仲を表現していること。一切の遠慮も見栄もなく、思っていることを素直に言えるのは、知己の仲で初めて可能となる。ここでは、黛玉が宝玉をからかえばからかうほど、黛玉の宝玉への思いの深さが露呈することとなっており、黛玉の批判の裏には宝玉への深い感情を見ることができる。このことは、この詩のすぐ後に加えられた脂評が裏付けている。

黛玉の罵倒は痛快だ！ こんなことができるのは黛玉しかいない。黛玉は素晴らしい！ この詩は良い詩だ！ 宝玉の知音といえるのは、それは黛玉なのだ。

罵得痛快！非颦儿不可。真好颦儿，真好颦儿。好诗！若云知音者，颦儿也⁹⁾。

脂評は、続作を痛烈に批判した黛玉の詩が、宝玉の行為——舘簾篇を書き続けるという思いつきだけでなく、宝玉の文章をも一蹴することになっており、そのことで黛玉の宝玉に対する情愛がいかに深い、まさに二人は知音の仲にほかならない証しであることを意味しているというのである。

二つは、作者の『莊子』への思い入れを詠み込んでいること。曹雪芹は宝玉の手を借りて『莊子』を書き続けるのだが、その発想の奇抜さと文才とを読者に知らしめた上で『莊子』と比べさせ、あえて黛玉の痛烈な批判によって宝玉の続作を低く評価した。ここにおいて、『莊子』がいかに優れているのかを読者に伝え、『莊子』に高い地位を与えようという曹雪芹

『紅樓夢』第二十一回『莊子』脠篋篇続作の意味するもの

の意図をみることができる。

宝玉がこの脠篋篇を書き続けたのは、まるで衝動的にしたことのようにみえるが、実は曹雪芹は宝玉がいかに『莊子』を好んで脠篋篇の内容に共感しているのかを示していると理解できる。脠篋篇の続作は、脠篋篇の文体・表現法を用い、脠篋篇の内容を踏襲していることは明らかである。わずか千字ほどのこの場面ではあるが、宝玉の日常生活にいかにも『莊子』が浸透しているかが知られる。また、曹雪芹が第二十一回で宝玉を借りて脠篋篇を書き続けたのは、宝玉のごく自然な行為であり、その行為そのものが莊子の価値観を反映しているからにほかならない。

二 脠篋篇続編にみえる宝玉の「三大病」

宝玉の書いた脠篋篇続作に対して、曹雪芹は、「盗み書き（无端弄笔）」、「無学（无见识）」、「たわごと（丑语）」などと、黛玉を介して痛烈に批判した。にもかかわらず、脂硯齋は第二十一回の脠篋篇続作のすぐ下に、この脠篋篇続作を称える脂評を記している。

まるで莊子や老子の筆致ではないか。奇なるかな、怪なるかな！

宝玉が酒の勢いで思わず筆を取って書き続けたのは、作者曹雪芹自身が莊子の立場に立ってしたことにはほかならない。思うに、どのような人ならあえて『莊子』を書き続けようとするだろうか、誰もしないだろう。しかし、そもそもこのなんとも不思議な筆致は¹⁰⁾、どこから発想したのか！ 絶賛せざるを得ない。

直似庄老，奇甚怪甚！

趁着酒兴不禁而续，是作者自站地步处——谓余何人耶？敢续《庄子》。然奇极怪极之笔，从何设想！怎不令人叫绝¹¹⁾。

脂硯齋は、曹雪芹が宝玉に『莊子』を書き続けさせるという発想が読者を驚嘆させ、その筆致はまるで老莊と同じであると、その「奇」「怪」なる文才を絶賛している。

しかし、この脂評は、肱篋篇続作を評価するためだけに書かれたものではない。脂硯齋は、宝玉が「あえて『莊子』を書き続けようと（敢续《庄子》）」したのはなぜかと問いかけ、莊子に成りきった曹雪芹（宝玉）が莊子の価値観と一体になったから、肱篋篇続けて論ずることができたと、脂硯齋自ら答えを導き出している。要するに、脂硯齋は宝玉がその思惟方法や価値観を『莊子』の世界と共有していることを熟知した上で、宝玉（曹雪芹）だからこそ『莊子』を書き続けることができるというのである。すなわち、肱篋篇を書き続けることが、曹雪芹（宝玉）が「莊子の立場に立ってしたことにはほかならない（自站地步处）」と強調し、それを読者に理解させたいというのが、脂硯齋がこの脂評を書いた目的のひとつである。

さらに、脂硯齋は「このなんとも不思議な筆致はどこから発想したのか（奇极怪极之笔，从何设想）」と、続作の具体的内容について問題を提起している。むろん、脂硯齋には『紅樓夢』作成の共同作業¹²⁾としての答えが用意されている。では、脂硯齋がここで肱篋篇続作の発想はどこから生まれたのかと、あえて読者に問いかけたのか。前掲拙稿で明らかにしたように、肱篋篇続作の必然的要因は、肱篋篇続作の直前の脂評にある宝玉の「三大病」であった。そして、この脂評が続作の直後にあえて「どこから発想したのか」と問題提起するのは、その問題の答えは「三大病」にあると示唆し、読者に肱篋篇続作の真意を解明する道に導こうとしているからである。すなわち、宝玉の「三大病」が続作にどのように反映されているのかを読者に考えさせようとするのは、脂硯齋がこの脂評を残したもう一つの目的である。そこで、脂硯齋のこの問題提起——続作と「三大病」との関係について以下に検討したい。

『紅樓夢』第二十一回『莊子』肱篋篇続作の意味するもの

まず、続作の冒頭の一文「花を焚き、麝を散じてしまえば、奥の部屋から忠告というものを解放することになろう（焚花散麝、而閨閣始人含其功矣）」について。ここにみえる「花」・「麝」が、それぞれ襲人¹³⁾と麝月をさしていることはいうまでもない。宝玉は、自分を諫める二人がいなくなれば、「忠告（劝）」はなくなるはずだというのである。宝玉は忠告や諫言から逃れたい、解放されたいという願望を、真っ先に自ら書きこんだ。これは、宝玉の「第一の大病」——「人に諫められることが嫌い（悪劝）」を反映した一文であることは明らかであろう。「花を焚き、麝を散」ずるとは、襲人を「焚き」、麝月を「散じて」二人を消滅させ、「諫められること」から解放されたいということで、宝玉は「第一の大病」から発する苦悩を、このような極端な表現で訴えようとしたのである。

では、宝玉の侍女は襲人と麝月だけではないにもかかわらず、なぜ二人の忠告や諫言からそれほど逃れたいと思ったのか。それは、二人が宝玉にとって最も身近な存在であり、自分を諫める代表的存在だからである。

襲人は宝玉の第一侍女で、勉強にまったく身が入らない宝玉に向かって、せめて勉強が好きなふりをせよと人前で諫めた（第十九回）。また、宝玉が黛玉に深い愛情を抱いていることを知った襲人は、その愛を「災い」、「心配の種」¹⁴⁾だと考え、宝玉の母王夫人に告げ口をし、目上の人に諫めさせようと画策した（第三十二回・第三十四回）。

一方、麝月はといえば、襲人が宝玉を無視することで諫めようとしたときにも、襲人に同調して、その理由は自分の胸に聞けと言いつち、宝玉の生き方に批判的な態度で接した（第二十一回）。

実は、作品中に麝月が宝玉を直接諫めたり、批判したりする場面はほとんどない。しかし、麝月のことを宝玉が「（襲人が）仕込んだ者（是你陶冶教育的）」¹⁵⁾と呼んでいることから、麝月は襲人の影の存在として宝玉に諫言する人物像と設定されている。事実、宝玉のよき理解者である晴雯ら

三人の侍女はむごい扱いされて辞めさせられたにもかかわらず、麝月ひとり自らの地位を守り続けた（第七十七回）。このことは、麝月が襲人と同じ穴の貉であることの証であろう。だから宝玉は続作の冒頭に「花を焚き、麝を散じ」と襲人と麝月の名を並べて挙げ、二人の諫言や批判から解放されたいという強い気持ちを表現したのである。

いずれにせよ、襲人と麝月は、宝玉に封建社会の礼教を守ることを求め、宝玉の立身出世を望み、そのために勉強せよと諫める。そのために、彼女たちは宝玉の行動を見張り、宝玉の求める「自由」を束縛し、精神的に追い詰める。このように、襲人と麝月は、宝玉の人生観や価値観を理解することができない代表的人物なのである。

しかし、襲人や麝月がしたことは、すべて当時の礼教に叶ったことである。封建社会に生きる人々の期待に応えられるように宝玉を諫め、宝玉の礼教に反する言動をやめさせようとすることは、儒教社会の侍女の役割であった。それは、当時の社会では決して非難されることではなく、むしろ模範的なこととして評価されることであって、非難されるべきは、むしろ宝玉の方であった。莊子の世界に憧れ自由を求める宝玉は、儒家的価値観に反発し、儒家の礼教に抵抗し、当時の社会にことごとく叛逆している人物である。

宝玉は、彼女たちと正反対の人生観を持っているからこそ、心の底から「諫められることが嫌い」である。だから、駄篋篇続作の第一句から、「第一の大病」が発症し始め、「花を焚き、麝を散じてしまえば、奥の部屋から忠告というものを解放すること」を切望していたのである。

次に、続作は「宝釵の気高い姿をそこない、黛玉の不思議な肉体を灰にして、情意というものを滅してしまえば、奥の部屋の美醜の差はなくなってしまうだろう（戕宝釵之仙姿，灰黛玉之灵窍，丧减情意，而闺阁之美恶始相类矣）」と続く。宝玉は、美しい宝釵と黛玉が消滅すれば、彼女た

『紅樓夢』第二十一回『莊子』肱篋篇続作の意味するもの

ちに対する「情意」も存在しなくなる。「情意」がなくなるということは、美と醜の別もなくなることにほかならない。これを文字通りに理解すれば、宝玉は単に「宝釵の気高い姿」にあこがれ、「黛玉の不思議な肉体」を慕う者であり、自らの感情をうまく処理できずに悩んでいることになろう。しかし、ここにいう「情意」とは、決して宝釵と黛玉に限って男女間の恋愛ではない。これこそ宝玉の第二の大病—「情を重んじ礼を軽んずる」をいうものである。

では、なぜこの「情意」は第二の大病を反映しているというのか。その答えは、以下の三条の脂評にみえる。

小説の後半の「情榜」¹⁶⁾をみると、「宝玉——情不情，黛玉——情情」と評されている。

后观情榜评曰：“宝玉——情不情，黛玉——情情”¹⁷⁾。（第十九回）

情不情。

情不情¹⁸⁾。（第二十三回）

宝玉は常に「情不情」なのだから、まして情ある者にはなおさらのことである。

玉兄每“情不情”，况有情者乎！¹⁹⁾（第二十五回）

さて、そもそも「情不情」とは何を意味するのだろうか。「情不情」とは、文字通りに解釈すれば、感情のないもの（こと）に情を注ぐということだが、実は、情がないもの（こと）にも感興が湧く。脂硯齋が「情不情」と評したのは、このような大邸宅に生まれるべきは自分のような俗物ではなく襲人たちだと、自らを貶め侍女たちを立てる発言（第十九回）に、風

に散って踏みつけられる花びらがかわいそうだと思う感情（第二十三回）に、下っ端の侍女小紅を起用しようとしたことが襲人たちを不愉快にさせるのではないかと思ひ悩む優しい気遣い（第二十五回）に対してなされたものである。

以上の三場面は、宝玉の異性への恋愛感情を描写した場面ではなく、宝玉が賤しい侍女らをひとりの人間として尊重していたり、感情を持たない落ち花びらにも感情移入していたりする場面であった。このような宝玉を脂評は「情不情」と概括したのである。

この「情不情」の対局にあるのが、脂評にいう黛玉の「情情」である。言うまでもなく、黛玉の生き甲斐は最愛の宝玉に深い「情」を注ぐことである。脂評が「宝玉——情不情、黛玉——情情」と対比するのは、黛玉が自分の感情に触れることにのみ情を抱くのであって、それ以外のことにはまったく無関心であることをいうのである。かたや、宝玉は「不情」のものだけに愛情を注ぐのではない。親兄弟、親類縁者はもちろん、宝玉が愛する人々に愛情を示し、細やかな気遣いをしている。だから、続作に「宝釵の気高い姿をそこなえば、あこがれる心もなくなり、黛玉の不思議な肉体を灰にすれば、その才を慕う心も消えよう」と、「情意」という魔物に惑わされている宝玉の心の内を描いている。まさに、脂評が「宝玉は常に『情不情』なのだから、まして情ある者にはなおさらのことである」と断ずる所以である。要するに、対象が侍女であれ、花びらであれ、あらゆるものに感情が移る宝玉の「情不情」こそ、続作に書かれた「情意」の正体である。

しかし、当時の儒教社会では、「情」は「礼教」に治められるべきであって、臆面もなく人前にさらけ出すなどというのは、儒教的教養を身につけた知識人としては認められない²⁰⁾。だから、宝玉の豊かな「情意」が儒教の「礼」と真っ向から対抗することとなり、理解を得られず顰蹙を買うば

かりである。この宝玉の「情意」を表現するために曹雪芹と脂硯斎がともに作り上げた²¹⁾ ひとつの語彙が「情不情」であり、「情不情」の現象は、「第二の大病」——「情を重んじ礼を軽んずる」病状と一致する。続作に、常に満ち溢れている「情意」をどう処理すればいいのかに悩む宝玉が、自ら「情意」を減してしまえば、「情」の悩みから脱出できるだろうと言ったのは、第二の大病に対する自覚症状にほかならない。

さて、自ら「情意」を上手く抑制できない宝玉は、「焚」・「散」・「戕」・「灰」という極端に非情な表現を使って悩みの解消法を試みた。これは「情不情」の「多情公子」が言える言葉だと考え難いのであるが、これこそ、「第三の大病」——「情極の毒」の症状だと考えられる。

まず、「焚」、「散」についていえば、「花を焚き、麝を散じてしまえば（焚花散麝）」と宝玉が「焚」という字を使うのは、全く自分を理解せずただただ諫める襲人を生活から抹殺したいと思うほど嫌い、棄て去りたいという気持ちを率直に言おうとするからである。のみならず、「麝月を散じ」の「散」字に離散の意を込め、彼女と別れて離れていくことを示していると考えられる。

実は、同じ第二十一回の脂評に、「襲人たちをこのように棄てるのはよろしくない（襲卿輩不应如此弃也）」の一文があり、その「棄てる（弃）」は襲人たちを嫌うと棄て去る二通りの意味を持つ。また、同脂評には、宝玉が「麝月のような婢（麝月之婢）」をも「棄てて僧侶になる（弃而为僧）」という「懸崖撒手」の内容がみえるが、それは宝玉が麝月を切り捨て、自ら人生を放擲した結末を暗示している。脂硯斎はこれらを「第三の大病」——「情極の毒」がもたらした具体的例として挙げたのである²²⁾。

要するに、続作の「花を焚き」と脂評のいう襲人を嫌い棄て去るのは、同じ意味を持つのであり、続作の「麝月を散じ」と脂評のいう麝月を「棄てて僧侶になる」の意味も一致している。「花を焚き、麝を散（焚花散麝）」

ずるように襲人を嫌い、麝月を切り捨てる気持ちは、「情極の毒」という内的要因があったからこそ生じたものである。

次に、「宝釵の気高い姿をそこなえば（戕其仙姿）」と「黛玉の不思議な肉体を灰にすれば（灰其灵窍）」から読み取れる「戕」と「灰」について。「戕」と「灰」は切り捨てる意味ではなく、傷や死を意味する語彙として理解すべきである。なぜ宝釵に「戕」を、黛玉に「灰」を使ったのか。

ところで、八十一回以降にあったとされる結末は、宝玉が宝釵を妻として迎え入れたものの、最後は彼女を棄てて離れて行ったのである。宝玉が家族を見捨てる行為は、宝釵の身も心も損なうことになるだろう。また、黛玉が「死ぬ」という結末を設定していたことは、八十回までに読み取ることができる²³⁾。だから、作者は宝釵に「戕」を、黛玉に「灰」（死を意味する）の字を使い分けたのである。これを前述の「花を焚き、麝を散じ（焚花散麝）」の意味と併せてみると、曹雪芹は宝玉の筆を借りて、この続作に四人の登場人物の結末を暗示していると考えてよい。すなわち、続作本体は「第三の大病」——「情極の毒」の脂評の内容を忠実に反映しており、脂評と続作とが一体となっている。

さて、宝玉が「焚」「散」「戕」「灰」四つの過激な言葉を使って、自らの悩みを解消しようとしたことは、「第三の大病」——「情極の毒」とどのようにつながるのか。宝釵の美しい姿が損なわれ、黛玉が死んで灰になると、「情意」を注ぐ相手が存在しなくなるのであるから、宝玉ははじめて「情」に悩むことから解放される。これこそ「情極の毒」の具体的な例なのである。「第二の大病」——「情を重んじ礼を軽んずる」を患う宝玉は、世間の人や物事に対して満ち溢れるほどの情意をもっている。その情意が極点に達して「情極の毒」に転化すると、「情意」を注いだ宝釵や黛玉に死を求めるようになる。そのようにいえば、宝玉がいかにも人の死を望んでいるようにみえるが、死とは化すこと、死は生の一部という荘子の考え

『紅樓夢』第二十一回『莊子』脰篋篇続作の意味するもの

に影響を受け、人間の死を冷静に見つめ、死に怖がらず、死をも受け入れることができる宝玉の死生観に裏打ちされたものである。それゆえに、脰篋篇続作に、宝釵を傷つけ、黛玉を死なすことによって、自分が楽になるというような残酷な内容となったのであろう。このような非情とも思える言葉こそ、まさしく莊子の死生観に影響された「第三の大病」の具現化したものであろう。

宝玉が脰篋篇続作の始めから、諫め役の襲人と麝月に非難の語を吐いたのは、「諫められることが嫌い」という「第一の大病」をもつからである。また、続作で書いた宝玉の「情意」は恋愛の情だけでなく、万人万物を愛するという「情不情」である。それは「情を重んじ礼を軽んずる」という「第二の大病」を反映していることにほかならない。儒教社会では、宝玉の「情不情」は認められないものである。その「情意」という病気が宝玉に多大なストレスをかけている。それに悩むものの、治療法を見つけることができない。そこでたまたま、読んだ脰篋篇に啓発され、書き続けたのである。つまり、悩みごとから解放されるには、悩ます本体を捨てればよいのだと考えるに至った宝玉は、「花を焚き、麝を散じてしまえば（焚花散麝）」諫められることはなく、「宝釵の気高い姿をそこなえば（戕其仙姿）」、「黛玉の不思議な肉体を灰にすれば（灰其灵窍）」、「情意」を引き起こす張本人がいなくなり、情意そのものが消滅するという考え方を表現したのである。これは「情極の毒」という「第三の大病」が病膏肓に入った証しであるといえよう。

このように、脰篋篇続作の内容は、すべて宝玉の「三大病」を反映しているものである。だから、続作の最後を宝釵、黛玉、襲人、麝月四人が、「綱を張り、落とし穴をつくって、天下を惑わし、陥れ」て、自分を精神的に苦しめているなどと悩みの原因を人のせいにするような一文で結んだのである。

肱篋篇続作そのものは「三大病」の発病した産物であること、そして、
莊子の考え方に共感する宝玉の「三大病」から誘発された奇抜な発想であ
る。これは脂硯齋の「この文章はどこから発想したのか」という問題提起
に対する答えであると同時に、自ら苦渋の決断をして出した処方箋ではな
いのかと考える。

三、宝玉が肱篋篇を書き続ける行為の意味

宝玉が肱篋篇を書き続けた必然的要因が彼の三大病であることは明らか
となったが、さらにその内容も三大病が反映されたものとなっている。た
だ、「三大病」とは別に宝玉が肱篋篇を書き続けた行為に対する脂硯齋の
見解は、第二十一回ではなく、次の第二十二回にみえる。

もちろん宝玉は何度も『莊子』を読んでいるが、たまたま「外篇」に
読み至ったところで書き続けるきっかけができ、それで書いたものだ
とするのが合理的であろう。……女性に関すること以外で、宝玉が意
識的に何かをすることはまずない。天地陰陽から、功利名誉、榮枯盛
衰に至るまで、あるいは文章や詩句を吟ずることさえ、自然界のこ
とも、人間界のことも、すべて無意識のうちに順応し、心のままに動
いている。たまたま得られても喜ぶこともなく、たとえ失ったとして
も悲しまない。故意に書き続けたと考えるなら、それは間違っている。
想其理，自然默默看过几篇适至《外篇》，故偶触其机，方续之也。
……可知除闺阁之外，并无一事是宝玉立意做（原误作）出来的。大
则天地阴阳，小则功名荣枯，以及吟篇琢句，皆是随分触情，偶得之
不喜，失之不悲，若当作有心，（则）谬矣²⁴⁾。

まず、脂硯齋は宝玉が肱篋篇を書き続けた行為をごく自然なことである

と言を極めて強調している。それは宝玉が胠篋篇を書き続けたのは、決して意識的にした行為ではないということである。脂硯齋が、「宝玉は何度も『莊子』を読んでいるが、たまたま『外篇』に読み至ったところで書き続けるきっかけができ（自然默默看过几篇适至《外篇》，故偶触其机）」たというのは、宝玉にとって『莊子』は生活の一部になっていることを明言するものである。換言すれば、曹雪芹が宝玉を通して『莊子』を愛読する場面を描き出すのは、作者自身の姿を読者に示していることにほかならない。「茶を入れさせて、ひとり『南華經』の一節」を読み、寂しさや悲しみを紛らわそうとする宝玉は、まさに作者の自画像であろう。

次に、本脂評は胠篋篇を書き続ける行為を通して、宝玉の生き方について概括している。その生き方は、脂硯齋が評するように、女性たちに気を使うこと、それが宝玉にとって唯一意識的にすることであり、それ以外のこと、他人にとっては大きな意味を持つはずの立身出世や毀誉褒貶など、宝玉には全く気にならないようである。世俗のすべてに対し「無意識のうちに順応し、心のままに動いている（随分触情）」と、宝玉は精神の最大限の自由を求め、人間の思考を束縛することから解放される道を探し求めている。

このような生き方は、『莊子』応帝王篇にある場面を想起させる。天根が無名人にどうすれば天下をうまく治めるのかと尋ねているときに、無名人は自分が造物者と平等になろうとしていて、さらに遥かな空の鳥に乗り、この世界の外に飛び出し、何も存在しない空間で遊び、無限に広い野原におろうと思い、天根のいう「どう天下を治めるか」のようなつまらないことで心が動かされることはあり得ないと言った。さらに、天根が再び尋ねると、無名人は心は無欲の境地に行かせ、気持を空漠の境界に合わせ、全てのことについても自然なあり方に従い、自分の心のままにすれば良いと答えた²⁵⁾。

無名人（莊子）にとって天下を治めることは無意味であるように、宝玉にとって「天地陰陽から、功利名誉、榮枯盛衰に至るまで（大則天地陰陽，小則功名榮枯）」、立身出世などに全く価値がないことである。鳥に乗り、無限な世界に行こうとし、絶対的自由を追求する莊子と同じように、宝玉も常に世俗の常識から逸脱し、精神の自由を求める。莊子が「心を淡に遊ばしめ、氣を漠に合わせ、物の自然に順いて（遊心於淡，合氣於漠，順物自然）」²⁶⁾ というように、宝玉もまた「自然界のことも、人間界のことも、すべて無意識のうちに順応し、心のままに動いている（大則天地陰陽，小則功名榮枯，以及吟篇琢句，皆是随分触情）」のである。脂硯齋は、宝玉像——莊子の境地を理想とし、自然に従い、心の赴きのままに生きている宝玉像を浮き彫りにし、肱篋篇を書き続ける行為そのものが宝玉の生き方を反映している。否、それはまさしく莊子の生き方そのものであるというのである。

莊子が求めるのは、絶対的な自由の境地であって、相対的な自由は全く無意味である。同じように、完全自由の境地を求める宝玉の姿は、肱篋篇の書き続きのした経緯から窺うことができる。好きな書物を自由に読んでいると、自ずから感興が湧き、すると自然に筆を取って思ったことをそのままに書いていたという宝玉の姿は、すでに自由の境地を楽しんでいるようだ。

また、肱篋篇では執着を捨て、相対的な価値観あるいは差別を捨てよというものである。人間に内在する執着心、固定観念、相対的な価値観は、本来あるべき自由な思考を束縛し、物事の真の姿を見失わせる。だから人はその束縛に苦しみ、悩む。その苦しみや悩みから解放される鍵を握っているのは当の本人である。すべてのことに差別を設けず、先入観も固定観念も捨て、自然に融合し、無心に順応するなら、完全な自由の境地に達することができるという。莊子が知恵を捨て人為を止めよというのは、人間に

内在する執着心を捨てよということでもある。

宝玉はこの莊子の考えを受け止めたとき、「悩まされる女性たちさえいなければ悩むこともなくなる」と思い至ったのである。このように、曹雪芹は宝玉を借りて、「無意識のうちに順応し、心のままに動いている（随分触情）」理想的な人間像を描き、それによって脰篋篇の意を伝えようとしているのであろう。

むしろ、この脂評で指摘された宝玉の特徴や生き方は第二十一回脰篋篇続作の場面だけをさしているものではない。全編にわたって宝玉の「随分触情」の特徴を見ることができる。例えば、第十七回には、宝玉が父賈政をはじめ年長者のお伴をし、完成したばかりの大観園に検分しながら、それぞれ庭園や樓閣に相応しい扁額や対聯を題する場面がある。そこで、常に賈政から厳しい叱責を浴びる宝玉であるが、ここでもある人が提案した扁額に対して、俗悪だと冷笑した。さらには、自然の美しさが不足していると思った宝玉が庭園に対しては、「見えすいた人力です（分明見得人力穿凿扭捏而成）」と批判し、「その山でないのを強いてその山とすれば、どんなに精巧をきわめても、結局はだめだ（非其山而强为山，虽百般精而终不相宜）」と言い切り、父親に向かって、そもそも「天然」とは何かなどと、詰問するほどであった²⁷⁾。

この場面でも、脂評にいうように、「文章や詩句を吟ずることさえ（吟篇琢句）」周りの状況を意識してすることはなく、目上の人に同調せず、思うままに俗悪の詩句に批判する。また、自然に順応するものこそ真に美しい、それこそが「天然」であるのも、まさに莊子の世界に憧れている宝玉だからこそ自然に言い出した言葉なのであろう。第十七回の場面もまた、周囲の状況に気にせず、「心のままに動いている」宝玉の姿を描いている場面である。ようするに、脰篋篇を書き続ける行為に対する脂硯斎の見解——心のままに動いているは、日常的なあらゆる言動に当てはまる。

この脂評は、宝玉が『莊子』を非常に好んでいること、宝玉の日々の生活の中で求める意味ある生き方が莊子の求めた理想と一致していることを示唆している。そして、宝玉が『莊子』を読むこと、肱篋篇を書き続けるという行為自体は現実からの逃避ではなく、莊子のいう絶対的な自由な精神を一貫して求め続け、自ら莊子の思想を実行しようとしていたからであることをも教えている。

このように脂評を通して理解すれば、宝玉が肱篋篇を書き続けたのは、宝玉のごく自然な行為であり、その行為そのものが莊子の思想を反映していることがわかる。それは、宝玉の生き方がいかに莊子の思想と一致しているか、宝玉にとって理想的な生き方、あるいは今生きている宝玉の姿がいかに莊子の思想と合致しているのかを物語っている。

お わ り に

宝玉がこの肱篋篇を書き続けたのは、まるで衝動的にしたことのようにみえるが、実は宝玉がいかに『莊子』を好んだか、肱篋篇の内容に共感しているのかということを示していると理解できる。肱篋篇の続作は、肱篋篇の文体・表現法を用い、肱篋篇の内容を踏襲していることは明らかである。わずか千字ほどの文章ではあるが、宝玉の日常生活にどれほど『莊子』が浸透しているかが知られる。

さらに、宝玉の「三大病」を駆使し、続作に書かれた襲人と麝月に非難の言葉は「第一の大病」を、宝玉の「情意」は「第二の大病」を、情意そのものが消滅せよという考え方は「第三の大病」を反映していることを検証した。要するに、肱篋篇続作の内容すべてが莊子を理想とするが故に生じた宝玉の「三大病」を浮き彫りにしていることにほかならない。

また、第二十二回にある脂評から、肱篋篇を書き続ける行為そのものに対する脂硯斎の見解——宝玉が莊子のように「心のままに」生きる姿をみ

『紅樓夢』第二十一回『莊子』肱篋篇続作の意味するもの

ることができた。すなわち、第二十一回で宝玉を借りて肱篋篇を書き続けたのは、宝玉のごく自然な行為であり、その行為そのものが莊子の価値観を反映しているからにはかならない。宝玉が理想とする生き方は宝玉の実生活そのものとなっていることが全編に見え隠れしていることから、脂硯斎の解釈した宝玉の生き方は、莊子の理想そのものと考えられる。

このように、脂評を媒介にして、肱篋篇続作が意味するところを読み解けば、宝玉の価値観、思惟方法も人間観も、そして宝玉生き方そのものもその根底に莊子の思想が横たわっていることがわかる。同時に、これは、『紅樓夢』全編にとって、主人公宝玉の人物像を鮮明にするために最も重要な内容である。

注

- 1) 將為肱篋探囊發置之盜而為守備，則必攝緘膝，固肩鐻，此世俗之所謂知也，然而巨盜至，則負匱揭篋，擔囊而趨，唯恐緘膝肩鐻之不固也，然則鄉之所謂知者，不乃為大盜積者也。金谷治訳注『莊子』第二冊（岩波文庫，2007年）p 42。本稿の『莊子』原文と訓読はこれによる。
- 2) 桃山学院大学総合研究所『人間文化研究』第2号（2015年）
- 3) 前掲拙稿「一 第一の大病」参照。
- 4) 日本語訳は飯塚朗訳『紅樓夢』（集英社，1980年）によった。p 231～232。本稿で引用する『紅樓夢』は、特に注記しないものはすべて飯塚朗訳による。なお、引用に際しては、繁雑を避けるために訳注に相当する部分を省いた。
- 5) 原文は《红楼梦》（人民文学出版社，2008年）によった。p 283。
- 6) 『莊子』の訓読は金谷治『莊子』（岩波文庫，2007年）によるが、『紅樓夢』に引用される『莊子』の日本語訳は飯塚訳による。
- 7) 『紅樓夢』I p 233
- 8) 《红楼梦》上 p 285
- 9) 邓遂夫校订《脂硯斋重评石头记庚辰校本》第二卷（作家出版社，2010年）p 346。本稿の脂評はこれによる。
- 10) ここにいう「筆致（筆）」とは、単に文章や筆使いだけでなく、「肱篋篇」

続作の内容をも含む言葉である。

- 11) 《脂硯齋重評石头记庚辰校本》第二卷 p 345
- 12) 『紅樓夢』が作者曹雪芹と評者脂硯齋との共同作業によって生まれた作品であることについては、拙稿「『紅樓夢』の思想的研究序論」(桃山学院大学総合研究所『国際文化論集』第47号, 2013年) p 306~310 に詳しい。
- 13) 襲人の姓は「花」である。
- 14) 『紅樓夢』Ⅱ p 378
- 15) 同上 p 505
- 16) 「後半」とは、失われた八十一回以降をいう。そこに、曹雪芹が主な登場人物の情の特徴を総括する場面があると考えられる。脂硯齋はその一部を引用して、「情榜評曰」というのである。
- 17) 《脂硯齋重評石头记庚辰校本》第一卷 p 307
- 18) 同上第二卷 p 380
- 19) 同上第二卷 p 402
- 20) 何謂人情。喜怒哀懼愛惡欲。七者弗學而能。……故聖人之所以治人七情，脩十義，講信脩睦，尚辭讓，去爭奪，舍禮何以治之（『禮記』禮運）。この点に関しては、前掲拙稿「宝玉の「三大病」と莊子——『紅樓夢』第二十一回の脂評を基に」の「二 第二の大病」に詳述した。
- 21) 注12を参照。
- 22) 前掲拙稿「宝玉の「三大病」と莊子『紅樓夢』第二十一回の脂評を基に」の「三 第三の大病」参照。
- 23) 同上。
- 24) 《脂硯齋重評石头记庚辰本》第二卷 p 363~364
- 25) 天根，遊於殷陽，至蓼水之上，適遭无名人，而問焉曰，請問爲天下，无名人曰，去，汝鄙人也，何問之不豫也，予方將與造物者爲人，厭則又乘夫莽眇之鳥，以出六極之外，而遊无何有之鄉，以處壘垠之野，汝又何段以治天下感予之心，又復問，无名人曰，汝遊心於淡，合氣於漠，順物自然，而无私焉，而天下治矣。（金谷治訳注『莊子』第一冊 p 222）
- 26) 『莊子』第一冊 p 222
- 27) 『紅樓夢』Ⅰ p 184

The Meaning of the *Quejia-pian* Sequel in the *Dream of the Red Chamber*, Chapter 21

WANG Zhu

In Chapter 21 of the *Dream of the Red Chamber*, after directly quoting the *Quejia-pian* 胠篋篇 section of *Zhuangzi* 莊子, Cao Xueqin 曹雪芹 creates an unconventional scene by having the hero Jia Bao-yu 賈宝玉 write a continuation of the section. Though less than 1000 words in length, the sequel keeps the original style of the *Quejia-pian*. It not only shows us how much the hero loves the *Zhuangzi*, but also the extent to which *Zhuangzi* pervades Jia Bao-yu's daily life.

Analyzing the sequel section in the light of Jia Bao-yu's 'three serious illnesses' in Chapter 21, we can clearly know what the hero thinks in his heart, and that all three 'illnesses' come from his love for *Zhuangzi*. Moreover, reading Chapter 22, we find that Jia Bao-yu continues to write the sequel, a symbol of his long-lasting pursuit of the absolute freedom espoused by the *Zhuangzi*.

By having his hero write a sequel to the *Quejia-pian* section, Cao Xueqin tells readers more effectively how much the hero longs for the perfect world of *Zhuangzi*, and how similar their two lifestyles are. This scene may be said to be the most important in the entire novel for understanding how *Zhuangzi*'s ideals provide the basis for the hero's values, his way of thinking, and his world view (and, by extension, for those of Cao Xueqin himself).